
とある国の、我ら陽気な番人たち

笹ヶ根伊都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある国の、我ら陽気な番人たち

【Nコード】

N6575I

【作者名】

笹ヶ根伊都

【あらすじ】

番人。とある国では彼らのことをそう呼ぶ。商人、傭兵、貴族に、魔術師。彼らが守るのは王が民か、正義か徳か。勸善懲悪、目指します。

人生は舞台だ。

男も女もその役者にすぎない。

「お気に召すま

ま」より

1、或る女

風の夜だった。

ヒースの葉ずれの音はまるで海鳴りのよう。

噂には聞いていたが、ここまでとは。

女はフードの前を掻き合わせた。

頭を巡らせば、ロズの町のある丘が黒々とした陰影になってヒース野にのしかかっていた。

ロズの町は領主の館を中心に町が広がっていて、これが高い塀に囲まれている。

出入りできるのは四方の城門だけという昔ながらの典型的な造りだ。もっとも、今は街の灯は一つ残らず落ち、海を照らす灯台のように燦然と街のありかを照らしているのは領主の館だ。

灯台か。

己の思考に苦笑した。

ここは内陸で湖はおるか海など存在しない。

ヒース野に囲まれたこの丘はまるで陸の孤島だ。

守りの固い城壁は断崖絶壁のようだ。

低い、犬の鳴き声。

女がゆつくりと方向を変えて声の方に向かう。

駆け寄ってきた犬は女の衣に甘えるかのように体を寄せて、ちらり

と一点を振りかえる。

「さて、何を見つけた」

おとなしく数歩下がって控える犬の頭をすするりと撫でその場にしゃがみこむ。

ヒースの草の合間に見えたのは足だ。

それも男の足。

泥に汚れた腹、血のしみ込んだ胸のレース飾りをたどり、悔しそうな表情を浮かべた顔まで来ると、女は舌打ちした。見覚えのある顔だった。

「かわいそうに」

右腕が前腕より切り落されている。

月が雲間からのぞいて、ヒース野を照らす。

女は身をかがめた。

そうして煌々と輝く月明かりの下、男の臉を下してやる。

視界が揺れているのは走っているせいだ。

振り返れば、いずれも立派な体格の男たちが背後に迫っている。

ついに追いつかれて、地面に引きずり倒される。

右のこぶしをかばって腹の下にするが、数人がかりではかなわない。

意識が遠のく中、男たちが右のこぶしを無理に開こうとする。

無理だと悟った男の一人が剣を抜いた。

白刃がひらめく、そして

厚い雲間に月が隠れて再びヒース野に闇が訪れた。

女はうずくまっていたままだった。

犬が小さく鼻を鳴らす。

そっと手を伸ばしてそのすべらかな頭に触れた。

思慮に耽っていた女は思いついて、皮靴を脱がせる。

右の皮靴を調べ終わり、左の皮靴に取りかかった。

その折り返しに固いものが触れる。

小さな布袋に指輪とコイン。

冷たい二つの金属をしっかりと握りしめる。

固さを柔らかい掌に刻みつけるように。

その意思を忘れぬように。

男の足元を整え女が立ち上がる。

「行こうか」

主人の視線をたどった犬がまっすぐにローズの丘をにらむ。

低い野生の遠吠えはヒース野を渡る風にかき消された。

2 ある夫婦 めおと

ローズは今まさに満開とばかりに咲き誇る花のようだった。

街中にはいくつもの大きな市が立ち、人で露地がごった返している。

余所からやってきた商人達が広げた店は、珍しい品物が手に入るとあつてさらに盛況だ。

中でも華やかな界隈では、一人の若者が美しい小瓶に入りたいわくありげな水を並べて張りのある声を上げていた。

さあさ、お立会い。

さあさお立ち会い。ご用とお急ぎでない方はゆっくりと聞いておいで。

ローズの街の娘さん、蝶よ花よと育てられ、そろいもそろって器量よし。

ここローズの花園は、王都の花もかなわない。

しかし、娘やよくお聞き。

花の命は短くて、咲いてしまえばしほむだけ。

さて、ここに取り出しましたのは、王都はやりの水晶水・・・

向かいの酒場で殺到する娘たちを見ていた二人連れがどちらからもなく鼻で笑った。

「いい声だね。あたしまで食いつきそうになっちまったよ。ねえ、あんだ」

黒い髪をさらり揺らして、不適に女がほほ笑んだ。

胡散臭い水など傍目から見る限りでは必要なさそうに映る美人である。

つまらなさそうとなりで昼酒をあおっているたくましい男は、旅の連れらしい。

鼻筋の通った横顔は精悍でしなやか動きに隙はない。

「やめとけ、すでにある物はちつと手を加えたところで、そうそうかわりやしねえよ」

男は容赦ない。

「お前にあんなもの必要ないって、素直に言えばいいじゃないか。あんだ」

「いや、思っていないから。かけらも、そんなこと思っていないから流し目をくれた女を一蹴。」

男は水晶水売りを眺めながら再び杯を傾けた。

水晶水は飛ぶように売れていく。

あんなにいきなり飛ばした売り方をして、あとでネタがなくなるなんてこたあねえだろうな。

水晶売り。

一瞬、離れている両者の視線が交わる。

「いてててててて。耳ひっぱんなよ」

「聞いてないでしょ？あんだったら」

女が執念深く指に力をいれたので、ついに男が椅子を倒して立ち上がった。

「『あんだ、あんだ』うるせえんだよ。俺は、あんだって名前じゃねえ。ズツカだ。ルシーダ！いい加減にしろよ」

ルシーダは動じず顎をついたまま上目使いに見上げる。

「するから、あれ買ってきていい？」

「勝手にしろ」

喜々として露店にかけていく女を見送って、ズツカは大きなため息をひとつ落とした。

これじゃ、先が思いやられる。
ルシーダと組むんじゃなかった。

酒場の亭主が近づいてくるのに気がついて残りの酒を飲み干す。

さあ、仕事だ。

「表の傭兵募集を見て、来てくれたのはあんたか。二人連れのパーティーをさがしているんだ。一人ではだめだ」

「あそこにいるのが、相棒でね」

亭主が水晶水売りと、値引き交渉に入っているルシーダを見て、口笛を鳴らした。

「あれでつとまんのかい？」

すらりとした上背に細腕、細腰。

分かるぜ、おやし。無理もない。

にやりと笑う。

「請け負いますよ。うちのかみさんは顔も腕も一流でね」

二人が通されたのは酒場の2階：おおよそよからぬ密談や密会に使われているだろう怪しげな小部屋だった。すでに、交渉相手は来ていて、指で机の表面を叩いているさまはずいぶんと待った様子だ。背は高いようだが不健康なほど痩せていて、黒いフードをかぶっているために、一層不気味な様子を醸し出していた。

「さて、諸君らに頼みたいのは、積荷の護衛だ。積荷は口ズから出て、国境で別の旅団に渡される。その数日の行程を護衛してもらいたい。帰りもまた、別の積荷を預かることになるので護衛して戻ってきてくれ。報酬は片道で金貨2枚。往復で金貨5枚だ」

「相場よりかなり出すんだな」

ズツカが口笛混じりに言うと、男が含み笑った。

「その意味をよく考えてもらいたい」

狡猾そうなまなざしをじろりと向けた男のさまを見て、ふと爬虫類が獲物を狙うさまを思い出した。そっと、音もなく忍び寄り、舌を

出しながらゆっくり視線をそらさず距離を測るあのしぐさを。

「ロスと国境の区間じゃ、山賊が出るなんて聞かないけど」

「そう…だが、君たちに言ってもらうのは裏の道だ」

二人とも沈黙する。

裏の道というのは山沿いの道で、山賊や追い剥ぎが息を殺して往來を見つめている道である。そもそもが後ろ暗いところのある積み荷や人の通り道なので、訴えが出ることもないためにさらに温床と化していた。

おいおい。

ズツカはため息をついた。

「おれたちが運ぶのはそんなにやばいものなのか」

男が笑う。

「さあ、どうかな。積荷の詮索はよした方がよいと思うがな」

さて…

ズツカは隣のルシーダを見た。

ルシーダは少し笑ってうなづいた。要は、受けろということだ。

そこで、交渉役としての腕を示すべく、ズツカは陽気に言った。

「よし、分かった。その代わり、金貨は6枚もらう。他に受ける相手がいるなら別だが、こんな仕事受けるのはおれたちぐらいなもん
だろうからな」

男は黙って机の上に袋を置いた。

「6枚だ」

持ち上げて音と重みを確かめる。

「たしかに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6575i/>

とある国の、我ら陽気な番人たち

2010年10月17日01時21分発行